

刊行にあたって

安斎育郎（立命館大学国際平和ミュージアム館長）

立命館大学国際平和ミュージアムは、1992年の開設以来、40万人を越える来館者を迎え、50回に及ぶさまざまなテーマの特別展などを開催してきた。この間、国際平和研究学会（1992年）、日本平和学会研究大会（1992年、2001年）を開催した外、第3回世界平和博物館会議（1998年）、第6回日本平和博物館会議（1999年）、平和のための博物館・市民ネットワークの第1回及び第3回全国交流会（2001年、2003年）など、平和博物館にとって重要な意味をもつ会議の開催にも取り組んできた。また、世界大学生平和サミット（1995年）、国際シンポジウム“*Youth at the Millennium*”（1999年）、世界学生平和フォーラム（2002年）など、学生を中心とする企画を担う役割も果たしてきた。

そして、いま、ミュージアムは大規模なリニューアルの過程にある。地階の常設展示は、時間軸を前後に拡大して、日清戦争からイラク戦争に至るまでを展示する方向で検討が進められている。1階には国際平和メディア資料室を開設し、書籍・雑誌等の閲覧やビデオ・CD-ROM・DVDなどの鑑賞、収蔵資料のコンピュータ検索や熟覧等を可能とするとともに、内外の平和博物館とも電子空間上で結合することを試みる。2階は「平和創造の空間」として、国連・政府・NGOの平和活動を紹介するとともに、京都からの平和の発信の部屋、リアルタイムで世界平和を考えるためのミニ企画展示室、「無言館京都アネックス」（仮称）などの展開も考えている。これまでの機構を改革して「ミュージアム平和教育・研究セクター」を設置し、平和ミュージアムの活動の展開に必要な研究を推進する。この『立命館平和研究』の発行も、行く行くはこのセクターの主要な仕事の一つになるものと考えられる。

開設から10年以上を経た当ミュージアムは、現代化の方向へ大きく足を踏み出しつつあるが、評価の定まった過去の事実だけを展示するだけでは、博物館は現代に息づく活動はできない。評価の定まっていない問題にもチャレンジし、情報を提供し、参観者とともに考え、悩み、対社会的に平和を発信していく姿勢が求められるし、そのための調査・研究活動が絶えず求められる。「ミュージアム平和教育・研究セクター」の立ち上げには、そのようなミュージアムのあり方に対する期待もこめられている。

2004年2月6日～11日、筆者はベトナム社会主義共和国ホーチミン市の「戦争証跡博物館」に招請された。同博物館はベトナム戦争を描いた博物館で、約10万人の日本人を含めて、年間およそ25万人が訪れる。現在、大規模なリニューアルが進められており、3階建の新展示館の完成が急ピッチで進められている。45人のスタッフをもつこの博物館は、展示のあり方についての日本の経験や技術を学ぶことを期待しており、立命館大学国際平和ミュージアムもこれまでの友好関係を踏まえて可能な協力をしたいと考えている。筆者の訪問もその一環であったが、こうした国際的な平和博物館の協力関係を進めていくためにも、当ミュージアムがたゆまざる調査・研究活動を推進していくことが不可欠であり、それがひいては世界の平和博物館の質的な向上にも貢献する道であると確信している。その意味で、この『立命館平和研究』はミュージアム活動の土壌を豊かにする重要な意味をもつものであり、年間3～5回に及ぶ特別展の開催準備などに忙殺されがちな中にもあっても疎かにされてはならないものと自覚している。